

2026 年度 一般入学試験（1 月 31 日）

国

語

（試験時間 60 分）

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、30 ページあります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 試験コード欄・座席番号欄

試験コード・座席番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名・フリガナを記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答 番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～13）に答えなさい。

サルや類人猿は他の動物たちと同様、あまり大きくない集団をつくり、一定の範囲内を移動して暮らしてきた。どれほど快適な場所であろうと、長く滞在すれば荒廃する。食料はなくなるし、排泄物で汚れてしまう。だが頻繁に移動すれば、環境を過度に汚染するのを防ぐことができる。汚染された環境もしばらくすれば元に戻る。時間が経つたらまたそこに帰ってくればいい。

このように移動しながら生きていく生活を遊動生活と呼ぶ。遊動生活は高い移動能力を発達させてきた動物にとって、生きるための基本戦略だった。

【a】、この遊動生活の伝統は人類にも受け継がれた。人類は長きにわたり遊動生活を行ってきた。一所に定住することなく、大きな社会を作ることなく、人口密度も低いまま、環境を荒廃させぬままに数百万年を生きてきた。

ところがその生活様式があるときに大きく変わった。人類は一所にとどまり続ける定住生活を始めたのである。約一万年前のことだ。人類は約一万年前に、中緯度帯で、定住する生活を始めたことが分かっている。

「 ① 」

一万年と言うと途方もない長さに思えるかもしれない。【b】、仮に一世代を二〇年とすれば（つまりヘイキンの親子の年齢差を二〇歳とすれば）、一万年前とは五〇〇世代前のことにすぎない。親を五〇〇人ほど遡るだけで一万年前に到達する。

二足歩行する初期人類は遅くとも四〇〇万年前には出現したと考えられている。すると人類の歴史のなかで一万年とはどれほどの長さであろうか。四〇〇万年のうちの一万年は、四メートルのうちの一センチに相当する。つまり、人類史の視点から見れば、人類が遊動生活を放棄し、定住生活を始めたのはつい最近のことだと言わねばならないのである。

「 ② 」

【c】日本列島について言うと、縄文時代以前の後期旧石器時代、列島の住人たちは、山麓や河川・湖岸沿いの一〇キロから二〇キロの範囲を通常の生活領域として遊動生活を送っていたと見られている。瀬戸内技法による石器が近畿・瀬戸内地方から遠く離

れた新潟県や山形県で発見されたり、産地が特定できる黒曜石製の石器が産地から二、三百キロ以上離れた遺跡から発見されることがあることから、彼らがかなりの遠距離移動を行っていたことも分かっているという。縄文時代は約一万年前に始まる。日本列島でも約一万年前まではそのような遊動生活が行われていたのである。

遊動生活は一般にこんな風に考えられてはいないだろうか。遊動生活を行っていた人間は、定住したくても定住できなかったのだ、と。人間は本来は住む生き物だが、住むためにはさまざまな経済的基盤が必要になる。だから、そうした経済的基盤をまだ手に入れていない、発展途上の遅れた人間たちが非定住を強いられ、遊動生活を行っていたのだ、と。

「 ③ 」

一つの場所にとどまっていられないなんて……。いしよつちゅう別のところに行かなければならないなんて……。住むことに慣れている定住生活者なら、そう考えるのは当然だ。そして遊動生活者について、彼らは定住したくても定住できなかったのだと考えるのも当然だ。

「 c 」、遊動生活者は、本当に、できることなら定住したいと考えていたのだろうか？

定住のための経済的基盤と言うときに、真っ先に出てくるのは農業などの食料生産技術のことだろう。では、遊動生活者は、畑を耕すなど、時間をかけて食料を手に入れる技術を身につけていないために、仕方なく移動する生活をしていただろうか？ すこし立ち止まって考えてみてもらいたい。人類は長い遊動生活の伝統のなかでホモ・サピエンスまで進化してきた。その人類が「いつの日か定住するぞ！」と願いつづけてきたなどと考えられるだろうか？ 何百万年も不都合な生活に耐えてきたなどと考えられるだろうか？

「 ④ 」

現在、人類の大半は定住生活を行っている。そのために私たちは、^(D)定住中心主義とでも言える視点から人類史を眺め、遊動生

活について価値判断を行ってしまう。住むことこそが人間の本来的な生活様式であると考えてしまう。

そうすると、人類の歴史の大部分は定住したくても定住できなかった歴史とみなされることになる。そして人類史は、どうやって定住生活が可能になったのかという視点から眺められることになるだろう。

しかし、定住する条件さえみたされれば人類はただちに定住するものだろうか？ たとえば、私たち定住民が遊動生活を始めることは極めて困難である。私たちはすでに一万年の定住生活の歴史をもち、それに慣れ親しんでしまっているからだ。同じことが定住化についても言えよう。定住生活の条件がそろったからといって、一万年どころか何百万年も続けてきた遊動生活をやめて、おいそれと定住化することなどできるだろうか？

既に確立された生活様式があるのに、進んでそれを放棄し、新しい生活様式をもとめるなどということは考えにくい。^(E)慣れ親しんだ生活様式を放棄することは大変な苦勞を強いられる出来事であるからだ。するとこう考えてみるができるだろう。人類は定住生活を望んでいたが経済的事情のためにそれがかなわなかったのではない。遊動生活を維持することが困難になったために、やむを得ず定住化したのだ、と。

Ⅱ これまでの人類史では食料生産の開始があまりにも強調されてきた。そのために定住の開始がもたらすインパクトは十分にケントウされてこなかった。

定住には食料生産は必ずしも必要ない。実際、北アメリカ北西海岸の諸民族やアイヌなどは定住生活を行っているが、農耕民ではない。彼らは食料生産を行わず、主に漁撈活動^{ぎょうりゅう}によって定住生活を営んでいる。

食料生産を重視する見方では、彼らの生活様式^Fを単に例外的なものとして片づけることしかできなかった。これは実に不思議なことである。なぜなら日本の縄文文化が、食料生産技術をもたない定住生活者たちによってはぐくまれた文化であることは、中学校の歴史の教科書にも書いてあることだからだ（稲作の到来時期については議論が盛んだが、いずれにせよ、稲作到来以前に定住生活が始まっていたことは疑い得ない）。

つまりこういうことだ。(G) 食料生産は定住生活の結果であつて原因ではない。農業などの技術を獲得したから定住したのではない、定住したからその技術が獲得されたのだ。「遊動生活者は食料生産ができないから定住したくともできない」という見方は定住中心主義に強く拘束されている。そして、食料生産を定住生活の前提とする見方は、よく知られた事実（たとえば縄文時代の人々は定住していたが食料生産を行っていなかった）を考え直してみるだけですぐに崩れてしまう、もろい偏見なのである。

「 ⑤ 」

遊動生活者は自然によつてもたらされるものを採集して食料を確保する。もちろん資源には限りがあるから、ある場所にとどまつていては食料が不足する事態が必ず訪れる。その場合には生活の場所を移動する。

よく誤解されることがだが、遊動民は一日中重たい荷物を背負つて風に吹かれながら歩き続けているのではない。移動も毎日行われるわけではない。現在の遊動民についての研究では、移動は数百メートルほどだと言う（もちろん、もつと遠くまで移動する場合もあるだろうが）。子どもやニンブ^イ等々の存在をあげて遊動生活の困難を説くことはできないのである。

遊動生活を行つていれば、食料に困ることはない。むしろ、定住^イ生活^イを行うと、食料^イに困るのだ。人間はすぐに周囲の環境を汚染し、資源を使い尽くすからである。定住生活者は、したがって、何らかの手段で食料を確保しなければならない。重要なのは貯蔵である。貯蔵の技術が発達すれば、食料のない時期にも飢えをしのげる。だが、場所によつては限界があるだろう。ここに、食料生産が促された原因がある。

そもそも具体的に考えてみて欲しい。ずっと移動しながら暮らしてきた人間が、慣れ親しんだ生活様式^(H)を捨ててまで、わざわざ^(ニ)ギテンコウなどに大きく左右される食料生産という実験に乗り出したりするだろうか？ 作物を育て収穫するまでには大変な時間がかかる。しかも極めてセンサイ^(ホ)な技術を必要とするため、一度にその技術を獲得することは不可能である。ならば、慣れ親しんだ遊動生活を捨てざるを得ない事情があつて定住生活を強いられた人たちが、苦勞して食料生産という技術を獲得したと考えるのが妥当ではないだろうか？

定住中心主義的なものの見方によって、私たちは具体的に考えてみれば分かることすら想像できなくなっているのだ。

(國分功一郎の文章による。ただし、一部変更した。)

(注) 瀬戸内技法 … 石器の素材となる剥片を作成する技法の一つ。大きさや形がそろった複数のナイフ形石器の作成が可能となる。

問1 破線部「過度に」・「イ」「しよっちゅう」・「ウ」「おいそれと」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 1 ～ 3。

- ア 「過度に」
- | | | | | |
|-----|-----|------|------|-----|
| 1 | | | | |
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 無闇に | 普通に | 控えめに | 念入りに | 適切に |

- イ 「しよっちゅう」
- | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-------|
| | 2 | | | |
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 予定通りに | 絶えず | たまに | だいたい | ごくまれに |

- ウ 「おいそれと」
- | | | | | |
|-----|------|-----|-----|------|
| | | 3 | | |
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 慎重に | 計画的に | 偶然に | 気軽に | 一時的に |

問2 空欄【 a 】 【 c 】に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

4

と

6

。

c	b	a
6	5	4
① なるほど	① いずれにせよ	① さて
② しかし	② すなわち	② しかし
③ ならば	③ けれども	③ そもそも
④ むしろ	④ また	④ たとえば
⑤ やはり	⑤ ほぼ	⑤ もっとも

問3

波線部(A)「その生活様式があるときに大きく変わった」とあるが、どのように変わったのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

7。

- ① 人類は、一定の範囲内での移住を繰り返して限りある資源や食料を有効に使っていたが、日本でいう縄文時代にあたる時期に、一所に定住する生活をはじめた。
- ② 人類は数百万年の間、小規模な集団で快適な場所に住み続ける生活を行っていたが、環境の汚染が進んだために、移動しながら生きていく遊動生活へと切り替えた。
- ③ 高い移動能力をもった動物たちとともに生きる遊動生活から、一所に定住して農耕を行う定住生活へと人類の生活様式が変化し、大きな社会が生まれるようになった。
- ④ 元々はあまり大きくない集団で一定の範囲内での遊動生活を行っていた人類が、たまにかなりの長距離移動を行い、世界各地にその痕跡を残すようになった。
- ⑤ 約一万年前に人類は、環境汚染に気をつかいながら限られた食料をやりくりする遊動生活をやめて、汚れた環境を回復させるために定住生活へと切り替えた。

問4

波線部B「四〇〇万年のうちの一万年は、四メートルのうちの一センチに相当する」とあるが、この文の役割の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

8

- ① 四〇〇万年という不可視の時間の長さに対して「四メートルのうちの一センチ」という現実存在する比較対象を提示し、人類の変化が非常に緩やかであったことを表している。
- ② 四〇〇万年という抽象的な時間を「四メートルのうちの一センチ」という具体的な距離へと換算することで、計算の正確さを強調して論の信頼性を高めようとしている。
- ③ 四〇〇万年を「四メートル」、一万年を「一センチ」と比喩的に表現することで、人類史上、定住生活は遊動生活と同じくらい古くから存在していたことを暗示している。
- ④ 四〇〇万年という膨大な時間を「四メートルのうちの一センチ」という矮小な数字に変換し、このギャップから今後の論の展開をダイナミックに見せる機能を果たしている。
- ⑤ 四〇〇万年という人類史のスケールを「四メートルのうちの一センチ」という身近な単位に置き換えることで、定住生活の歴史の短さを具体的にイメージしやすくしている。

問5 波線部C)「日本列島について言うと」とあるが、本文で示された「日本列島」の出来事の説明として最も適切なものを、

次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 9。

- ① 環境の荒廃がそれ以上に進まないように、日本列島の人々は、約二万年前に遊動生活をやめて定住生活を始めた。
- ② 縄文時代以前の日本列島の人類は、山麓や水辺の近くの一〇キロから二〇キロの範囲のみで遊動生活を送っていた。
- ③ 遠く離れた地域製の石器の発見によって、後期旧石器時代の人々は遠距離を移動していたことが分かった。
- ④ 縄文時代になると、日本列島の住人たちは農業による食料生産ができるようになり、集落を作って定住生活を始めた。
- ⑤ 一万年前の日本では、人々は経済的基盤をもたなかったため、定住したくても定住できず遊動生活を行っていた。

問6 波線部D「定住中心主義とでも言える視点」とあるが、これはどのような考え方のことであるか。その説明として適切な

ものを、次の①～⑤の中から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

10

・

11

。

- ① 現代の定住生活を価値観の基底に据え、遊動生活はそこに至るまでの未成熟な生活様式だったとみなす考え方。
- ② 人類の肉体や精神、社会的能力といった要素は、すべて定住生活を実現するために発達してきたという考え方。
- ③ 食料生産技術のような定住生活に必要な人類の能力は、すべて遊動生活のなかで獲得したものだとする考え方。
- ④ 遊動生活者たちも、定住生活のための安定した経済基盤さえ整えば、すぐに定住を始めるはずだという考え方。
- ⑤ 過去の人類史を顧みることなく、人類は現代のような一所に定住する生活しか営んでこなかったとする考え方。

問7 波線部(E)「慣れ親しんだ生活様式」・(F)「彼らの生活様式」・(H)「慣れ親しんだ生活様式」が指すものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ選択肢を複数回用いることは認めないものとする。解答番号は

12
14

(E)

12

(F)

13

(H)

14

① 遊動生活

② 定住生活

③ 遊動生活・定住生活以外の生活様式

④ 人間の本来的な生活様式

⑤ 定着した生活様式一般

問 8

波線部(G)「食料生産は定住生活の結果であつて原因ではない」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 現在の定住生活者がもはや遊動生活には戻れないように、ひとたび豊富な食料や資源を得られるような状態に慣れてしまった人々は、再び不自由な生活レベルには立ち返れないため、雪たまるま式により多くの食料を求めてしまうということ。
- ② 北アメリカの諸民族やアイヌのような、農耕をせずに定住生活をする人々の存在からも明らかのように、農耕による食料生産は定住のための必須条件ではなく、むしろ定住によって枯渇する食料や資源を補うために増産が必要となったということ。
- ③ 縄文文化と稲作の到来時期との関係からも分かるとおり、人々の定住生活が始まったのは農耕による食料生産が可能になったからであり、人類史における生活様式のダイナミックな変化は、常に革新的な技術や発明を原因として進むということ。
- ④ 北アメリカの諸民族やアイヌは、農耕民ではないために漁撈活動によって生活に必要な食料や物資を集めているが、本来、定住生活による安定した食料生産によって得られるはずの資源を放棄しているという点で本末転倒しているということ。
- ⑤ これまでの人類史は、定住生活の始まりと食料生産の開始という二つの要素を密接に関連付けて考えてきたが、定住生活よりも食料生産の方が先に起こったのは明白であり、この二つの出来事の先後関係が逆転してしまっているということ。

問 9

波線部(1)「具体的に考えてみれば分かることすら想像できなくなっている」とあるが、これと関係の深い本文中の語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

16。

① 戦略

② 基盤

③ 様式

④ 偏見

⑤ 価値

問10

本文からは、空欄①～⑤で示す箇所いずれかに入るべき次の段落が脱落している。この段落が入る箇所として最も適切なものを、①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

17。

むしろこう考えた方がいいのではないか。人類の肉体的・心理的・社会的能力や行動様式は、むしろ遊動生活にこそ適している。だからこそ、何百万年もの間、遊動生活を続けてきた、と。

問11

本文についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

18。

① 人類は約一万年前に定住生活を始めたが、それは文明が進歩したからというよりはむしろ、遊動生活を維持することが困難になり、環境への適応が迫られたためだった。しかし本文には、人類が遊動生活をやめざるを得なかった詳細な理由までは記されていない。

② 遊動生活では日々の食料を採集する必要があるが、定住生活では貯蔵が可能となり、いつでも食料は豊富にあった。このように遊動生活は本質的に非効率であるために、人類は経済的基盤が整うとすぐに定住生活への移行を目指したと本文では述べられている。

③ 数百万年もの長期にわたって人類が遊動生活を続けてきたという事実に基づいて考えると、そもそも人類は定住に向かない生き物であると言える。本文では、いかなる手段によって人類がこの困難を乗り越えて定住生活を実現したのか、詳細に説明している。

④ 縄文時代以前の人類は、自らの人口を支えるだけの食料生産が実現できなかったために、人口密度を一定に保ちながら、中規模の社会しか構成してこなかった。しかし、農耕を伴う定住生活に切り替わったことが人類の大発展につながったと本文は推測している。

⑤ 定住生活は環境に負荷がかかって汚染が進んでしまうために、人類は長らく一所にとどまらない遊動生活を行ってきたが、これこそが人間本来の生活様式であったと本文は主張する。本文では、この汚染プロセスについて、複数のパターンに分けて詳細に解説している。

問12

本文の内容と特徴の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

19。

① 本文は、一般知識があれば理解できる難易度であるため、幅広い知識層の読者を対象にしていることが読み取れる。疑問を投げかけ、それに対する筆者の回答を提示する対話形式で話が進んでいくため、専門的な分野の話題であつても興味をもって読み進めやすい。

② 本文は、時代順に歴史的事実を整理するという淡々とした叙述の繰り返しで展開されている。全体的な論旨はこれまでによく知られた内容から逸脱するようなものではないが、既知の知識の再解釈から、従来見過ごされてきた新しい視座に切り込むという仕掛けがある。

③ 本文は、専門用語や筆者が提唱する独自の概念をそれなりに盛り込んであるが、特定の狭い話題を扱っているために、内容そのものは理解しやすい。ただし、時代・地域ともにごく限定された説明であるため、これらの内容を普遍化してとらえるのは危険である。

④ 本文は、難解な専門用語をなるべく避けた平易な語彙で書かれていて、一文一文も短く区切られていて読みやすい。さらに読者への問いかけや反論を交えつつ、具体的な事例を提示しながら論が進むため、内容は専門的であるものの理解しやすく説得力がある。

⑤ 本文は、理解しやすい語彙を中心に用いているが、経済学や歴史学の知識が必要となる箇所があり、主旨を正しく理解するには多少の困難を伴う。誰もが知っている話題で始まり、最終的には問題提起で終わるといふ、読者自らに考察を促す構成となっている。

問13 二重傍線部(イ)～(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答

番号は
20
24。

(イ) ヘイキン

20

- ① イツキンの食パンを切り分ける
- ② アタイセンキンの活躍を見せる
- ③ キンサで一着となる
- ④ 油断はキンモツである
- ⑤ 物資がキントウに行きわたる

(ロ) ケントウ

21

- ① 家計のケンヤクに努める
- ② 異常な数値をケンシュツする
- ③ 売上がケンチョウに伸びる
- ④ 長年のケンアンが解消する
- ⑤ シンケンに議論を戦わせる

(ハ) ニンプ

22

- ① 希少な植物のブンブを調べる
- ② 冷蔵庫をゲツブで購入する
- ③ チンブな演出が不評を買う
- ④ シンロウシンブが式場に入る
- ⑤ カンブなきまでにたたきのめす

(ニ) テンコウ

23

- ① 選挙にリツコウホする
- ② 一筋のコウミヨウがさす
- ③ コウガンムチな態度をとられる
- ④ 予報では明日のコウウ確率が高い
- ⑤ オウコウ貴族が集まる

(ホ) センサイ

24

- ① センパクな知識をひけらかす
- ② センザイ的な需要を探る
- ③ 食物センイを豊富に含む
- ④ センボウのまなざしを向ける
- ⑤ 計画をジッセンに移す

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

「イヤに冗長な曲りくねった、変に読悪い文章だなア」。明治初期の学生生活を描いた坪内逍遙の「当世書生氣質」で、仕送りが途絶え、翻訳で生活をしのぐ登場人物が友人から訳文を酷評される。

英語の百科事典を訳すアルバイト。「工業上の事にやア、中々科学的の言葉があるから、解らんとくも少しばあるが、大概いい加減に意識して、早速かねにする料簡さ」。「科学的」に「テクニカル」のルビがある。

技術用語の翻訳の難しさは昔からだろう。小説のような不心得者はわずかだろうが、門外漢にわかりづらい訳語も多い。航空業界などで安全確保のために予備を含めた二重のシステムを持つことを「冗長性」と呼ぶのもその一つだ。

国際宇宙ステーションに係留中のボーイング社の新宇宙船スターライナーが無人で帰還する。約10日の滞在予定が8カ月に延びた宇宙飛行士2人にはお気の毒だが、米航空宇宙局（NASA）も問題続きの機体の安全性に自信を持てなかったらしい。

宇宙飛行士の山崎直子さんは「輸送手段の冗長性を確保することが好ましい」とコメントしていた。スペースX社のスターシップとの2本柱が冗長性というわけだが、ボーイング社は近年、民間航空機でも設計上の冗長性の欠如が問題視されていた。

余剰の意味の英語「リダンダンシー」が冗長と訳され、「くどくどしく長い」という本来の意味から離れた用語を生んだらしい。もちろん「冗長な文章」を正当化することにはつながりませんが……。

『毎日新聞』二〇二四年八月二七日「余録」による

（注）ルビ … 振りがな用の小さな文字。振りがな自体を指す語句としても用いられる。

問1 破線部ア「坪内逍遙」とあるが、写実主義を重視する彼の主張に刺激を受け、近代的な口語体（言文一致体）による小説『浮雲』を著した人物を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 25。

- ① 島村抱月
- ② 二葉亭四迷
- ③ 田山花袋
- ④ 島崎藤村
- ⑤ 夏目漱石

問2 破線部「イ」「氣質」・「ウ」「料簡」の読みの組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。

解答番号は

26

- | | | |
|---|---------|----------|
| ① | イ きしつ | ウ りよかん |
| ② | イ きしつ | ウ しごと |
| ③ | イ かたぎ | ウ りようけん |
| ④ | イ かたぎ | ウ かかん |
| ⑤ | イ じじょう | ウ すんぼう |

問3 破線部エ「門外漢」の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

27。

- ① 畑違い
- ② 有識者
- ③ 玄人
- ④ 専門家
- ⑤ お門違い

問4

波線部(A)「輸送手段の冗長性を確保することが好ましい」とあるが、本文の文脈を踏まえれば、これはどのような観点から出されたコメントであると考えられるか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

28

- ① 経済性の観点
- ② 科学性の観点
- ③ 精神性の観点
- ④ 安全性の観点
- ⑤ 効率性の観点

問5

波線部(B)「もちろん『冗長な文章』を正当化することにはつながりませんが……」とあるが、これはどのようなことを述べているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

29。

- ① 「冗長な文章」は書き手の内容に対する理解の不足から生まれるものであり、技術用語の「冗長性」と同じくやむを得ないものである場合がある。
- ② いわゆる「冗長な文章」は、知識不足の読者のために高度な内容をわかりやすく解説する過程で生じることを理解してほしい。
- ③ 技術用語の「冗長性」は効率性を高めるために二重のシステムを持つことを意味するものであり、文章の「冗長さ」とは完全に無関係である。
- ④ もともと「冗長」という言葉には「くだくだしく長い」という否定的な意味が含まれており、文章としては正当なものではない。
- ⑤ システムのリスク管理において「冗長性」は重要な要素であり、内容にとって重要でない部分を過剰に含む「冗長な文章」とは同列に論じられない。

問 6 二重傍線部(イ)～(ホ)の品詞名を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は

30

～

34

。

(イ) 友人から訳文を酷評される

30

(ロ) しばしばあるが

31

(ハ) 「冗長性」と呼ぶのもその一つだ

32

(ニ) コメントしていた

33

(ホ) 冗長と訳され

34

① 名詞

② 動詞

③ 形容詞

④ 連体詞

⑤ 副詞

⑥ 接続詞

⑦ 助詞

⑧ 助動詞